

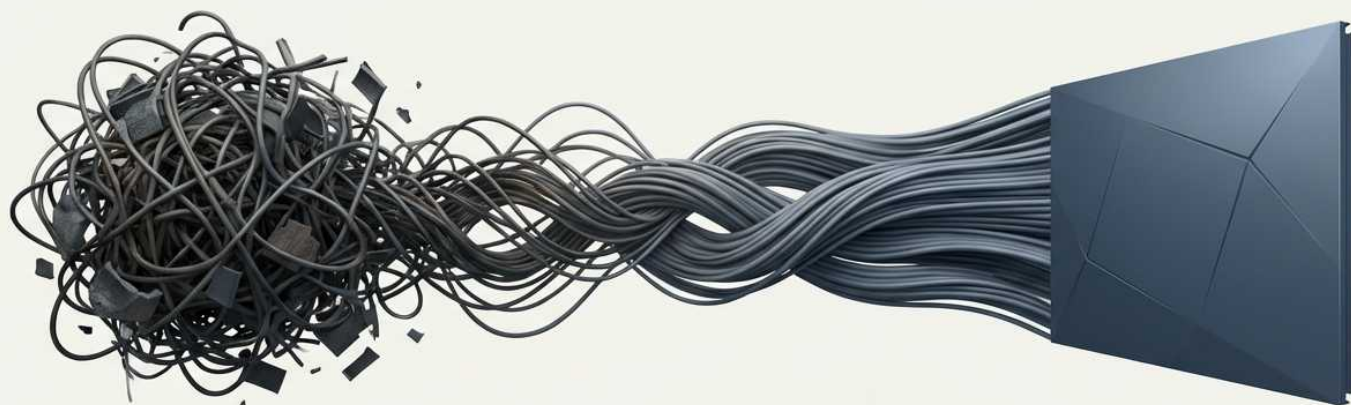
「スタートアップ企業による革新的な技術や
ビジネスモデルの紹介」②

株式会社リマーレ

C00 颯田夕貴氏

複合プラスチックに“出口”をつくる

デザインの力で社会実装の壁を越える



資源循環フォーラム 講演用資料

REMARE

私たちの資源循環は、着実に前進している。

日本の資源循環政策は進展し、多くの素材でリサイクルの仕組みが社会に定着しつつあります。自治体の皆様の長年の努力が、着実な成果を生んでいます。



PETボトル



アルミ缶



古紙

しかし、複合プラスチックだけが循環から取り残されている。

回収はされている。しかし、その先に社会で活用される「出口」が存在しない。

容器包装・製品由来プラスチックの中で、複合プラスチックは決して少なくない量を占めながら、その多くが循環のループに入れずにいます。



自治体が直面する「努力が報われない」現実



- **住民への説明**：複雑で分別が難しい。



- **再資源化の壁**：安定した引き受け先・再資源化ルートがない。



- **最終的な結末**：結果として、多くの複合プラスチックは焼却・サマルリカバリーに依存せざるを得ない。



皆様の多大な努力が、本来あるべき「循環」につながっていない。

複合プラスチックは、本当に「悪者」なのだろうか？

複合プラスチックは、軽量化・高機能化を実現するために社会に必要とされ、私たちの生活を支えています。問題は、素材そのものではありません。



「出口がない」とは、どういう状態か？

これは、技術の問題ではありません。
分離・再資源化の技術は、すでに複数存在します。

量と質がつかない
実証レベルでは成功しても、
事業として成り立つ規模の商流
が確立されていない。



使い道が決まっていない
再生材を「使いたい」と思わせる
魅力的な用途が設計されていない。

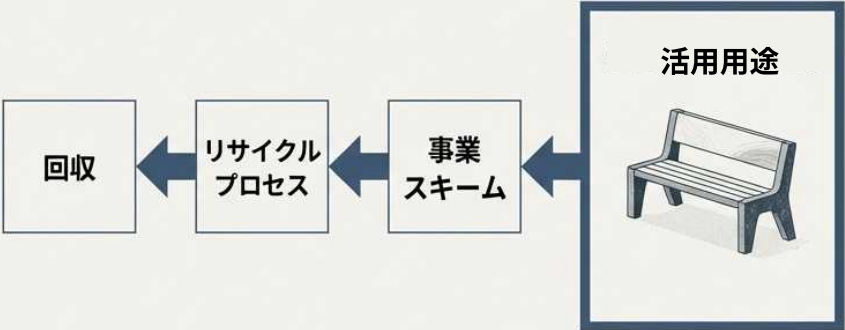
プレイヤーが分断されている
自治体、事業者、メーカーがそれぞれの部分最適で
止まり、循環の全体像を描けていない。

REMAREの本質的な視点：
課題は「技術」ではなく、
「循環全体のデザイン」にある。









私たちは、回収されたものをどう処理するか、
という「入口」発想から脱却します。

まず「どう使われるか」という出口をデザインし、そこから逆算して、循環の全体像を設計する。

- 用途デザイン (Application Design)
- 事業デザイン (Business Design)
- 循環デザイン (Circular System Design)



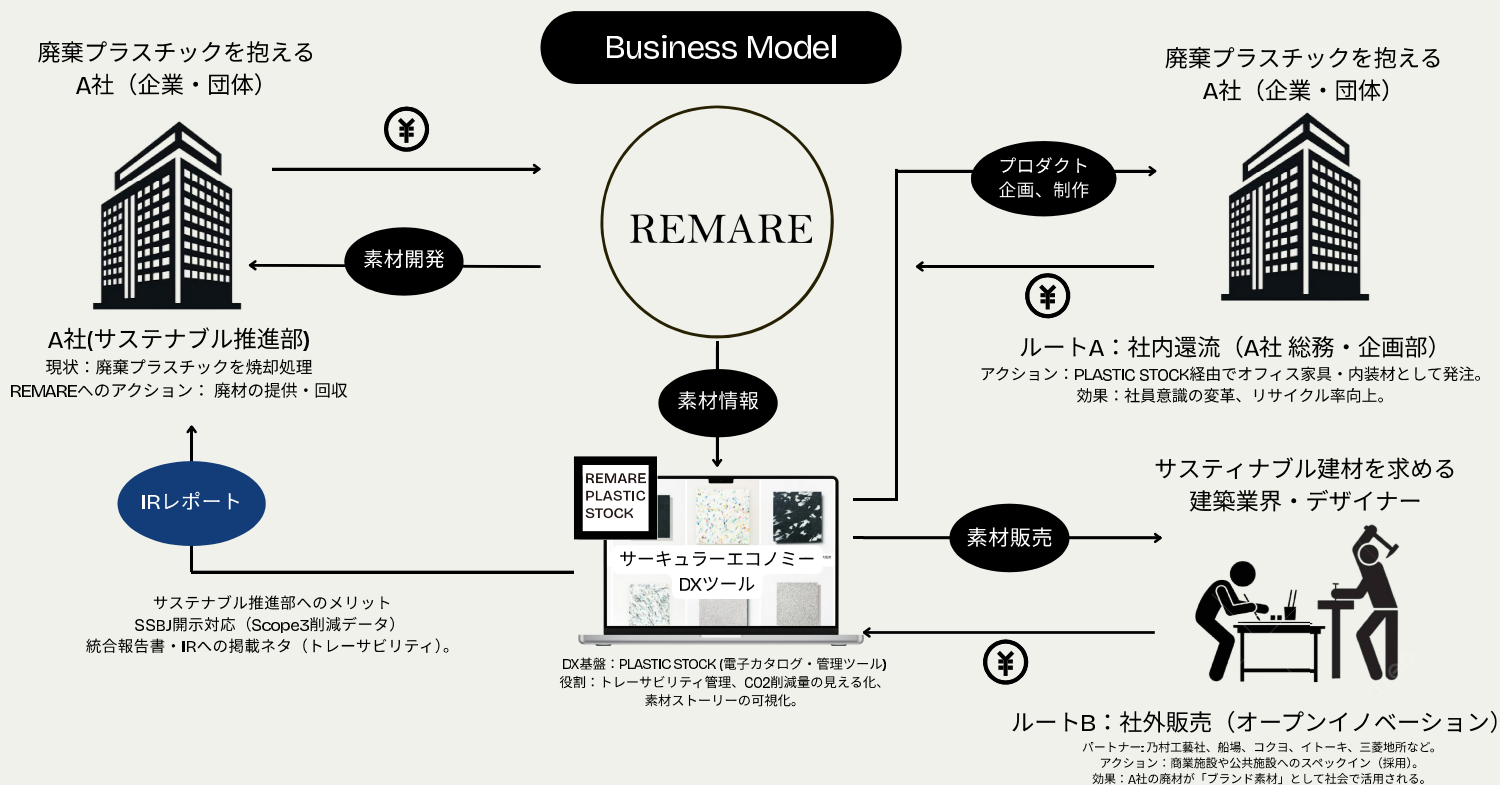
私たちのアプローチは、従来の手法と何が違うのか。

一般的なアプローチ	REMAREのアプローチ
 起点：技術起点 (Technology-first)	 起点：出口・用途起点 (Exit/Application-first)
 最適化：処理の最適化 (Processing-focused)	 最適化：「使われる」ための設計 (Designed to be used)
 ゴール：技術実証で終了 (Ends at tech demo)	 ゴール：社会実装が前提 (Social implementation is the goal)
 結果：社会に見えない循環 (Invisible circulation)	 結果：社会に見える循環 (Visible circulation)

社会実装の鍵は、「選ばれる素材」をつくること。

どれだけ高度な技術でリサイクルしても、再生材が「使いたい」「採用したい」と思われなければ、循環の輪は回り始めません。価格や品質だけでなく、新たな価値や魅力が不可欠です。

デザインは、単なる見た目の問題ではない。
再生材への「需要」を創造するための、最も強力な手段です。



実践：空間採用実績 500件以上

partner client : コクヨ様 / 船場様



製造工程で機械仕様上発生するABS樹脂の塊（通称：樹脂ダンゴ）を再資源化したリサイクルマテリアルです。排出実態が十分に知られず再利用が難しい素材でしたが、この廃材を活かしたプロダクトを制作することで、ものづくりに携わる社員がサステナブルな生産を考えるきっかけとすることを目的としています。

partner client : 日本ガイシ様 / 乃村工芸社様



原料輸送時に使用されるフレコンバッグは、内部に付着するセラミック灰が理由でリサイクルが困難でした。そこでこの素材を活用し、新オフィスのサインやテーブルなど複数の什器へ採用しました。一過性ではなく継続的に活用できる用途を前提に素材選定を行っています。

実践：出口を可視化する「REMARE Plastic SUMMIT」

REMAREが主催する、リサイクルプラスチックの社会実装を目的としたプラットフォーム。

- 展示 (Exhibition) : 素材の可能性をプロトタイプで示す。
- 対話 (Dialogue) : 分野を超えたプレイヤーをつなぎ、新たな用途を議論する。
- 実践 (Practice) : 社会実装に向けた具体的なプロジェクトを創出する。

技術を説明するのではなく、循環の「出口」を社会に体験してもらう場。



実践から得られた、社会実装を加速させるための示唆。

1. 素材単体では動かない

再生材のペレットやスベックだけを見せても、議論は進まない。



2. 「使われるイメージ」が議論を動かす

5組の建築家・デザイナーが制作したプロトタイプは、「これなら使える」「こんなことも可能か」という具体的な対話を生んだ。



3. 「出口」が多様な主体をつなぐ

目に見える魅力的な出口があることで、初めて行政、企業、市民が同じ未来を向き、協力体制が生まれる。



複合プラスチックは「処理困難物」ではなく、「未設計」な素材。

出口がないのではなく、出口まで誰も設計してこなかっただけ。

私たちは、社会実装を前提にこの課題に挑戦しています。

回収の先に、使われる未来を。

